

自分だから、できること

大竹一樹さん (平成8年生 金山町)

高校進学を機に生まれ育った金山町を出て、3年前に実家にUターンしてきた青年だ。

正直、進学当時は出て行きたいという想いも強かったそうだ。

しかし、金山町ではないところで暮らしてみることで、初めて生まれ育った環境の存在に気づかされた。

「高校は越後平野で、近くに山がなかった。紅葉を見ないで冬を迎えたのが初めての体験だった。そしたら、いつも見上げれば目に飛び込んでくる地元の山の迫力と美しさに、改めて感動した。この風景はどこにでもある“当たり前”ではないのだ。ここにしかない“特別”で、ああ、地元が好きだなって。迷いはなかった」。

そんな想いがきっかけとなり、金山町に戻ろうという決意と共に、大学では地域活性の研究に打ち込み、限界集落での多様な生き方暮らし方を論文にまとめた。



現在霧幻峡の渡し船の船頭と、2022年から“みんなで作る農園”への挑戦を始めた。まずは観光農園というかたちでスタートしてみたが、商品化できる高品質な野菜を大量に育てることが目標ではない。

「結」という繋がりに注目している。

今年始めた畑には、今まで出会った人の繋がりから、少しずつ様々な人が手伝いに来てくれるようになってきた。霧幻峡での出逢いもある。

畑を見に来る、ちょっと遊びに来るという感覚で、ゆっくりじんわりと関わる人、手伝って

くれる人が増えてくる。

何気ないおしゃべりをしながら畑仕事をして、終わったらみんなで畑で採れたものを囲んで美味しいものを共有する。

仕事でも依頼でも支援でもない、自発的に、その“場”を求めて人が集まるようなコミュニティ「結」が緩やかにできつつある。

大竹さんが目指す、お金を介さない、楽しい時間と美味しいもののトレードオフの在り方だ。

たった数十年前まで集落であった助け合いの姿が、今また新しく生まれようとしている。



「この場を通して人の力、温かさ、環境の豊かさを感じて欲しい。

自分の暮らし方に共感したり、安らぎを感じてくれる、喜んでくれる人がひとりでも増えたら嬉しい。

ここで生まれ育って、周囲に存在を認められている自分だからできる、特権を見つけた」。

生まれ育ったこの土地で、自分らしく楽しく暮らしている姿を見せることが、地元を元気にすると大竹さんは信じている。

始まったばかりの農園は、まだまだぼんやりしたものだ。

緩やかで多少曖昧だが、関わる人の中で揉まれながら、動きながらなんとなく形創られていくくらいが丁度よいのだ。決して自分にも仲間にも無理はさせない。

手探り状態だが、地元への想いに一生懸命で誠実な彼の生き方そのものが、奥会津で豊かに暮らすモデルのひとつとなっていく。

目下目標は友達を増やすことだと言う。

「この時代に地元で生まれた自分の役目として、町の外と中をうまく繋いで行ける存在になりたい」。

大竹さんが生み出す“場”と繋がりが、これからの奥会津の姿となっていくのだろう。

